

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(20)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月29日に行われたドルトムント公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Westfälischer Anzeiger

March 11, 2020

Elisabeth Elling

ドルトムントにおけるパーヴォ・ヤルヴィとソル・ガベッタ

アンコールでソル・ガベッタは、彼女が如何に輝かしい程のチェロ技法をマスターしているか、その全てを物語っていた。高音の親指の位置から低音の二声、ゆらゆらとしたフラジオレットトーンから弦をつまびく力強さに至るまでの名演奏。そして羽ばたくようなポジション移動に伴いソプラノのメリスマが響く。彼女は歌声も聴かせたのだ。ドルトムント・コンツェルトハウスの観客は瞬間呆然とし、うっとりとして夢中になってペトリス・ヴァスクスの《ドルチッシモ》に耳を傾けた後、彼女の演奏を熱狂的に称賛した。

その前に、ガベッタは東京のパーヴォ・ヤルヴィ指揮のNHK交響楽団と共にシューマンの《チェロ協奏曲 イ短調》を披露した。ここでもアルゼンチン出身の彼女は、卓越した技量で作品の探索に没頭する。ヤルヴィが極度に抑制するオーケストラの横で、抒情的そして確固たる音色で彼女は演奏を始める。トゥッティの反復進行では音楽の響きに合わせて体を揺り動かし、震動し、第一ヴァイオリンとアイコンタクトを保つ。自らのパートでは、しみじみと思わず歌いたくなるような感覚で音色を深める。

パーヴォ・ヤルヴィはこの日本のオーケストラを、時には控えめと言えるほどに穏やかな身振りで指揮する。それだけにブルックナーの《交響曲 第7番》で彼が見せた表現力は驚くほどのパワーだ。それぞれの楽器グループとオーケストラ全体が奏する、並外れて均質な正確さで壮大な作品の世界が広がる。曲は流れるように息づく。ヤルヴィはディテールを練り上げ、荘重なアダージョにおいて弦楽器奏者のビブラートを取り戻し、第三楽章のへ長調のトリオでは抒情的な瞬間を鼓舞する。第一楽章のフォルテのパッセージでは、コントラバス・チューバが全金管楽器と共にささやくように響く時でも、力強い第4楽章のユニゾンと同様に聴き取ることができる。熱狂させられた時間の後の拍手喝采は、ガベッタへのそれを上回った。